

海外出張の思い出（ナイジェリア編⑨）

高島敬明

前は、S 班長が「踵骨骨折」という大けがをして病院に担ぎ込んだものの、一晩病室で過ごしましたが医者とは相談することなく私の経験から兎に角日本に早く帰国させるしかないと判断し、朝迎えに来たエマニエル君の車に乗せてキャンプに戻ったところまででした。

キャンプの H さんから S マネに事故の概要を報告してもらいました。足のカカトの踵骨骨折で全治 1 か月であり、歩行は出来ないこと等を報告してもらいました。S マネは「S 班長はこの 1 年近くよくやってくれた。1 か月くらい何もしないで体を治してから帰国してください」との話でした。そんな安易な考えなんだと私は不安になり、私から、①踵骨骨折は完治するまで時間がかかること、②歩けるようになってもいびつに骨がくつき易いため、満足に歩けなくなること、③こちらの十分でない医療で満足に歩けなくなった場合、当社の組合の絡んだ責任問題になること、等を繰り返して説明しました。やっと S マネージャーは理解をしてくれたようで「社員が何人か帰るときに付き添って帰すようにします」とのことでした。彼の帰国には皆で空港まで送りましたが班長は悪い悪いと呻くように言いながら空港の中に消えて行きました。結局彼は、半年間日本で治療を受けましたが、まともに歩くようにはなりませんでしたが、組合問題にはなりませんでしたが、歩くとき踵を地面に着くたびに痛みを感じるのだそうで、一生体を横に振りながら歩行をするのです。つらい人生になってしまいました。

1979 年に始まった「第 2 次オイルショック」が 1980 年（昭和 55 年）に入ってアフリカの産油



ラゴスの街並み（2015 年）ウィキペディアから

国ナイジェリアにも押し寄せて来ました。まず最初にジーゼル（軽油）が品薄になって来ました。ガソリンもそうですがジーゼルは我々活動の拠点であるキャンプの全ての生活を支えているのです。250 馬力のジーゼルエンジン 2 台が交互に昼夜を問わず働き続けていて、これが止まると完全に我々の生活は出来なくなって来るのです。まずコンテナハウスに設置された冷房設備、我々の毎日の食事を支えている大きな冷凍庫、セキュリティ設備、上水道の水処理設備、下水道の処理などすべての生活に関係した電気の供給が止まるわけです。冷凍庫には 3 か月分の食材が眠っていますが、当然ダメになるでしょうし、冷房設備でも 2～3 日は辛抱できますが毎日となれば話は違ってきます。兎に角ジーゼル油を確保するしかないのです。

我々は毎日、毎日大使館に通って情報を収集しジーゼルの入手に努めて行かなくてはならなくなりました。あてもなく石油スタンドを回ったり、日本の商社や各企業をわけもなく歩くわけですが事情はどこも同じです。そうこうするうちに今度はプロパンガスが無くなって来ました。これも大変な問題です。魚国のコック T さんはプロパンガ

スで毎日料理を作っているのです。これも毎日商社を頼って紹介を受けて工場やトラックターミナルのような所をまわり、少ない量でも買って帰りました。ターミナルではシュシュとボンベにガスを詰めて行きます。詰め終わるとエマニエルとともに奪い合うようにボンベを確保します。

その詰め込み場所の吹きさらしの休憩所では、作業員が鼻歌を歌いながら煙草を吸って談笑しているのです。危険物を扱っているのにこれでは命がいくつあっても足りません。毎日本業そっこのけでジーゼルとプロパン確保のために奮闘しました。企業がこんなわけですから一般の家庭はもっと大変のようでした。S マネージャーの家も大変のようでした。

燃料確保が厳しくなるにつれて、我々に「麻雀を覚えてもらうんだ」と奥さんと中学生くらいの娘さん2人がキャンプに来るようになりました。麻雀と言っていますが魚国のコック T さんの作る夕食が目的なのです。それに子供さんはいいのですが、奥さんの派手で刺激的な服装はキャンプの男たちには目の毒です。彼らは日本にいる家族から半年も一年も離れて暮らす者ばかりです。こんな男たちの前に出る服装ではありません。H マネも私もほとんど困り果てて、どうしたものかと思案の真っ最中に事件は起こりました。魚国の T さんが「私はキャンプの皆さんの食事を作るためにアフリカまで来たのです。マネージャーの家族の為のコックではありません」と筋の通った文句を言いました。最初のうちはよかったのですが、とうとう夕食時になってもコンテナハウスから出てこなくなりました。H マネは、「高島さん、あなたが一番付き合いがあるのだから行って話してください」と言うのです。隣では奥さんが麻雀をしているので仕方なく裏から回ってノックしますが返事がありません。作業員の食事もあるし困り果てました。冷凍庫や冷蔵庫にはインスタントラー

メンがたくさんあるのは知っていました。今日は皆にラーメンで我慢してもらおうと冷蔵庫に入ろうとした時、H マネが飛んできました。「それはまずいよ。ここはコックさんの領域だから我々が入るとなお話がこじれてしまうよ」とのことでした。奥さんには「コックが体調不良で・・・」と説明し何とか引き上げてもらいました。すると笑顔で T さんが出て参りました。遅い夕食に T さんは小エビのいっぱい入った特上のチャーハンを作ってくれました。流石に H キャンプマネも決心して S マネに事情を話しました。短パンの刺激的な姿が見られなくなるのは残念でしたがこれで一件落着です。

ジーゼルの問題があってから協力会社の運送屋にもよく行くようになりました。そこに雇われのドイツ人メカニシャン(機械技師)がいてすぐに仲良くなりました。もっとも言葉は通じないのですがジーゼルについても彼からよく片言の英語でアドバイスをいただきました。人の良い彼はいつもニコニコ顔で話しかけます。「タカチマ、お前は何故アフリカで結婚しないのか?」「いや日本には妻子が待っているんだ」と言ってもしつこく食い下がります。挙句には「タカチマ、固形のカレーのルーを分けてくれないか」ときます。「カレーのスープは最高なんだ」「OK。コックに相談するよ」と話して別れました。彼にはあれこれ世話になっていることもあり、T さんにお問い合わせすると、「又ですか」とのことです。私以外にも誰かに話しているようでした。T さんは、仕方がないかとカレールー3個を冷蔵庫から持ってきてくれたので、それを持って運送屋の構内の住宅まで届けに行きました。中から彼がニコニコしながら出て来ました。さらに後ろから例のミミズのように髪を編んだ頭の子供たちが3人出て来ました。明らかに彼の子供です。結婚を勧めるはずです。ドイツ人、いや白人は生命力が旺盛と思いました。(つづく)